

# 中世末から近世初頭の善光寺門前町

笹本正治

The Zenkōji Temple Town from the End of the Medieval Period to the Beginning of the Early Modern Period

はじめに

- ① 中世の善光寺町
  - ② 善光寺の甲府移転
  - ③ 海津城と長沼城
  - ④ 空き寺時代の町
  - ⑤ 復興する町
- おわりに

## 【論文要旨】

長野市は善光寺の門前町としてつとに有名であるが、本稿では中世末から近世初頭にかけて、その実態を探る。

善光寺門前は中世を通じて町として発展を遂げたが、永祿元年（一五五八）に善光寺本尊以下が武田信玄によって甲府に運ばれ、僧侶や職人・商人までが甲府に移った。善光寺が甲府に移転してから、善光寺平では海津城と長沼城が地域の拠点となり、そこに城下町が形成された。本尊が移った善光寺門前町は衰退し、地域の経済的な中心地も海津・長沼の両城下町に移った。豊臣秀吉の手によって善光寺の本尊が信濃に帰されたのは慶長三年（一五九八）であった。四〇年以上も本尊がおらず、門前町としての実態を失っていた地域が、再び門前町になったのである。これから以降急速に善光寺門前町は宗教都市・宿場町として、政治権力とは関係なく復興・発展し、再び北信濃の経済的な中心地としての役割を帯びた。この間、門前町を形成するために政治

的な命令がなされたわけではなく、職人や商人などが自らの意志で集まった。一方、信玄によって築かれた海津城は近世に松代城となったが、その城下町も政治的な都市として発展した。

中世都市は人々が自由に集まったとされ、自治などが問題とされるのに対し、近世都市ではややもすると城下町が典型とされ、領主権力による町の成立やその統制だけが論じられる。ところが、善光寺門前町は政治的に町人が集められたわけではなく、人々が勝手に集まり、その後もいわば自治都市の側面を強く持っていた。近世都市でもこのような町人の側に主体があった都市が多く存在したはずで、今後は多様な都市のあり方を考えていく必要がある。また、中世から近世への断絶を強調するのではなく、両者の連続面にもつと目を向けねばならない。

## はじめに

本共同研究で私が分担した課題は「中世都市から近世都市への移行」である。従来この時期の都市のイメージは、強大な領主権力の下で作られた城下町に代表される。それは自発的に出来、自治を持った中世の町が、近世大名の強大な権力に屈服し、大名の統制下に組み入れられていく図式ともいえる。一方で、自治的な都市は畿内を中心に研究され、関東の事例はほとんど示されなかった。こうした通説への見直しのために、研究会において私は甲斐の吉田（現、富士吉田市）を対象に、戦国時代の吉田が領主権力とかわりか少ないにもかかわらず、独自に町を形成し自治都市であったことを確認し、吉田が近世にあっても実質は町でありながら、城下町でないために領主側には村として掌握されたことを報告した<sup>①</sup>。つまり、中世から近世への移行期に、町を形成する人々が自ら集まり、自治を行う町が東国にもあったことを示したのである。

本稿では引き続き、近世において領主権力にかかわらず人が集まり、町ができていく例を確認したい。そのために、一九九八年の冬季オリンピックを開催した長野市に目を向ける。長野市が善光寺の門前町として成立したことは周知の事実である。例えば高等学校の教科書の一つである『詳説日本史』には、戦国時代の「都市の発展と町衆」の中で、門前町の例として伊勢神宮の宇治・山田とともに信濃の善光寺の長野などが特に有名であると注記されている<sup>②</sup>。

戦国時代の代表的な門前町とされる善光寺町を、なぜ近世の都市成立を考える素材にするかというと、これから詳述するように、中世を通じて出来上がっていた善光寺町は戦国時代にほとんど崩壊し、近世になってから再び建設されたからである。したがって、戦国時代の代表的な門前町の例とするのに、少なくとも信濃の善光寺町は適切ではない。この

町は領主権力とかわりなく、近世初頭に急激に人が集まってできた町で、なおかつ城下町で無い点に特徴がある。このため、中世から近世への移行期の都市の成立の一端を伝える例として、興味深い事例となる。しかしながら、考察しようとする問題に関する史料は決して多くない。このため、本稿は当該期における善光寺町の概説にならざるを得ない。

### ① 中世の善光寺町

善光寺の縁起などによれば、本田善光が善光寺如来を信州に運んだのは六〇二年で、伊那郡に安置したが、六四二年に水内郡芋井の郷に移ったという<sup>③</sup>。実際の善光寺の創建は明らかでないが、寺内より白鳳時代の瓦が出土するので、七世紀の後半頃には瓦葺きの堂舎ができていたようである<sup>④</sup>。

平安時代に浄土信仰が普及して霊地参拝の風習が盛になると、善光寺にも多くの僧侶や巡礼者が詣るようになった。中でも注目されるのは女性の参詣で、平重衡が斬られたと聞いた手越の長者の娘が出家して善光寺で菩提を弔い、曾我十郎の妻の虎御前も出家して善光寺に赴いたという。また「とはすがたり」の作者も善光寺に参っている。これは善光寺大本願の上人が、現在でも尼僧であることに直結する。中世には、民衆の幅広い信仰の上に善光寺が存在したのである。

善光寺に関係する僧侶、寺で消費する物資などを用意する職人や商人、参詣者に対応する人々などが善光寺門前に集まって住みつき、中世までに町が形成された。本来善光寺の町は宗教施設である善光寺を核として、人々が自主的に形成した町で、権力者などによって上から政治的に作られた町ではないといえよう。

『名月記』の安貞元年（一一二七）九月の条に、善光寺の近辺を「後庁」と唱え、目代等の居る所だとあり、鎌倉時代にはこの地が政治的に

も一つの中核をなしていた。宗教的な町が大きくなり経済的にも重要性を帯びたので、支配者がここを押えるために住んだのであろう。そうした鎌倉時代の善光寺、及びその門前町の情景をわずかに伝えるのは「一遍上人絵伝」で、善光寺を中心にして家が建てられている<sup>(6)</sup>。

室町時代の応永七年（一四〇〇）に小笠原長秀が守護として善光寺に打ち入った。守護所が府中（松本市）に存在したのであろうにもかかわらず彼が善光寺に赴いたのは、ここが政治的に北信濃の中心地として特別な機能を持っていたためであった。『大塔物語』はその折の見物人の様子を、「見物諸人、善光寺南大門及着花川高島打履子無所、凡善光寺者、三国一之霊場、生身弥陀浄土、日本国之津、門前成市、堂上如花、道俗男女・貴賤上下・思々心々風流不遑毛拳、若殿原者、例目結十徳、室町笠引籠有為口覆体、或児・若僧・中童子・戸隠山之若山臥有イ行風情、或傾城・白拍子・夜発之倫纏紅紫之色、染蘭麝香」と伝えてい<sup>(7)</sup>。日本国の津として、門前市を成し、さまざまな人々が集まっていたことがうかがえる。

また幸若舞の「折烏帽子」では盗人として、「善光寺の南大門のいはらかひの右馬のせう、こちやうのよむぢ、さい口の七郎、はつたのぎやうぶ、かいつかみのわし次郎」などを挙げており、南大門の前、後町などが町であったことがわかる。

このように室町時代までに、善光寺門前町は善光寺平における中心的な意味を持つ特別な町になっていたといえる。

## ② 善光寺の甲府移転

門前町として栄えたこの町を一変させたのは、武田信玄と上杉謙信が戦った川中島の合戦であった。

『甲府善光寺明細帳』によれば天文二十二年（一五五二）八月に武田晴

信と村上義清は川中島で戦い、善光寺が焼けたとい<sup>(8)</sup>。ちなみに、これより先の文明六年（一四七四）六月四日に、善光寺は金堂および四門悉くを焼いた<sup>(10)</sup>。『長野県町村誌』は、その後再建の記事が見えないので、飯堂であったのではないかとしている<sup>(11)</sup>。

『妙法寺記』によれば、天文二十四年（弘治元年・一五五五）に、

七月廿三日武田晴信公信州へ御馬ヲ被出候、村上殿・高梨殿・越後守護長尾景虎ヲ奉頼、同景虎モ廿三日ニ御馬被出候而、善光寺ニ御陣ヲ被食、武田殿ハ三十丁此方成り、大塚ニ御陣ヲ被成候、善光寺ノ堂主栗田殿ハ旭ノ城ニ御座候、旭ノ要害ヘモ武田晴信公人数三千人サケハリマイル程ノ弓ヲ八百張、鉄砲三百挺入候、去程ニ長尾景虎再々責候へ共不叶、後ニハ駿河今川義元御扱ニテ和談被成、壬十月十五日、双方御馬ヲ入被食、以上二百日ニテ御馬入申、去程ニ人馬勞無申計、

という事実があつたとい<sup>(12)</sup>。

この折、長尾景虎（上杉謙信）は善光寺に陣を張った。一般にはこの年の八月八日に善光寺に火がかかったとされるが、史料の根拠は薄い。謙信は弘治元年（一五五五）の合戦の折に、大御堂の本尊以下を府内近郊の善光寺浜（新潟県上越市）に移したとい<sup>(13)</sup>。上杉謙信は永禄五、六年頃のものとされる金津新兵衛尉などにあてた書状に、「春日・府内・善光寺門前、其外所々火之用心之義付而、重申遣候、以時夜行立之、堅可及其政道候、惣別日暮候者、町人衆も往来可相止候、如何共ねらい候て、火付可及成敗候、（中略）善光寺町に信州の者共おほく候間、やき取なとに火付候事も可有之候」と述べている。したがって、この頃越後の善光寺門前は春日山や府内と並ぶ町になっており、そこには信州からやって来た者たちが多く住んでいたのである。

一方、信玄も善光寺の本尊以下を同年小県郡に運び、永禄元年（一五五八）甲府に遷座した。その状況を『王代記』は、「善光寺如来九月廿

日甲府付玉フ。板垣十月三日地引始<sup>15</sup>としてゐる。信玄は謙信への対抗もあって、善光寺信仰を権力の中に取り込み、善光寺町の経済力なども掌握しようとしたのだろう。この時に善光寺の門前に住んでいた町人も如来と共に甲府に移った。門前町の宿命とはいえ、善光寺の本尊が動く、それに関係した人々や町までが動かざるをえなかったのである。

甲府の『善光寺記録』によれば、「弘治元乙卯、武田信玄公生身如来を信州佐久郡根津村ニ奉遷、根津村に安置する事三年」、その後永禄元年（一五五八）九月一九日に信州の本尊や当本尊、その他の靈仏などを甲州に移し、しばらくは中郡の上条村日輪法城寺の仏殿に入れた。永禄元年から本堂を建立しようと思ひ、馬場美濃守が奉行になってこれを造った<sup>16</sup>という。永禄一一年四月三日には、武田信玄が善光寺の条規を定めて栗田鶴寿に与えた<sup>17</sup>。

永禄二年（一五五九）三月二〇日付けで武田氏が出した「分国商売之諸役免許之分」には、武田氏が出した商売の諸役免許の文書がまとめられている。この中には、

一、善光寺還住之間、一月二馬壺正口諸役令免許者也

奏者 飯田源四郎

弘治二年

八月二日 水科修理亮<sup>18</sup>

という文書が含まれている。記載からして水科修理亮は、善光寺如来が甲府に来る以前より甲斐に来ていたようである。あるいは武田氏による善光寺仏の移動と関係していたかもしれない。文書内容より水科氏は商人であったことが判明するが、近世の善光寺町の役人に水科氏がおり、信濃の善光寺町が本拠地であった。弘治二年（一五五六）段階では商人が帰る場所として善光寺町があったのである。この文書全体では武田氏の分国内の商売の諸役を免許しており、それが永禄二年に再度確認されている形をとっている。水科氏はその後も信濃と甲斐とを結んで商

売をしていたのであろう。

永禄四年（一五六一）には、信玄と謙信の一騎打ちがなされたとして人口に膾炙している第四回の川中島合戦が行われた。両者の一騎打ちはともかく、川中島合戦では最大の激戦だったが、この年の九月にも善光寺は焼けたという<sup>19</sup>。詳細は不明ながら、本尊のなくなった寺に戦火がかかった可能性がある。

元亀元年（一五七〇）九月六日、信玄が善光寺別当の栗田鶴寿に本領を安堵し、新知行として水内郡千田・市村をあてがった<sup>20</sup>。こうして栗田氏は武士として武田氏に位置付けられ、天正四年（一五七六）一〇月一七日に勝頼から栗田鶴寿が遠江の高天神城の守備を堅固にするように命じられた<sup>21</sup>。天正九年三月二二日に徳川家康が高天神城を攻め落としたが、その際に栗田鶴寿は戦死した<sup>22</sup>。そこで勝頼は五月二五日に永寿に亡父鶴寿の所領を安堵した<sup>23</sup>。

天正九年（一五八一）七月四日に武田勝頼が、栗田永寿とその他善光寺衆にあてて出した定書には、

定

一、善光寺小御堂坊中并町屋敷等之儀、可為栗田計之上者、不可有他綺之事

付、但仕置等有相違之儀者、可加下知之事

一、同町屋敷諸役之儀、向後令免許之事

一、六月之高棚、上町二打之者、諸法度以下、可為栗田計事

一、仏前拝趨之僧、上下共二不可致普請、但於無拋儀者、為如来崇敬候之間、若輩之人者可相勤之事

一、從信州本善光寺集來之僧俗、或守罪科人、或出罰錢等之役儀、一切停止之畢、但有佞人隱置盜賊、又者背国法者、可行嚴科之事

右条々、以法性院殿直判被定置之上者、自今以後も弥不可有相違者

也、仍如件

天正九年辛巳

七月四日（花押・武田勝頼）

栗田永寿殿

其他善光寺衆<sup>(24)</sup>

とある。右からこの頃までに、甲府の善光寺の門前にも町ができ上がったことが知られる。同時に第五条から、信濃の本善光寺からも多くの人がここに移ってきていたことが明らかである。こうして門前町の基盤となる善光寺の本尊や僧侶・商人などが甲府に移ったのであるから、信濃の善光寺の門前町は消えていったものであろう。

天正一〇年（一五八二）に武田家が滅びると、織田信長の長男の信忠は善光寺如来を岐阜に移した。彼が父と共に本能寺の変で亡くなると、弟の信雄は如来を尾張清須の甚目寺に運び、さらに徳川家康が天正一一年に遠江の浜松鴨江寺に奉遷した。しかし家康の夢枕に立った如来が甲府に帰りたいと言ったとして、如来は再び甲府に返された<sup>(25)</sup>。一月二八日に徳川家康は、甲府善光寺の寺領および諸法度を旧規の如く栗田永寿の計らいに任せた<sup>(26)</sup>。

慶長二年（一五九七）六月、豊臣秀吉は前年の地震によって倒壊した方広寺大仏の代わりに、善光寺如来を京都に迎えることにして、諸大名に路次送迎を命じた<sup>(27)</sup>。如来は七月一八日に京都に入った<sup>(28)</sup>。その頃から秀吉の健康がすぐれなくなつたうえ、翌年八月一七日に霊夢を見たとして、秀吉は信州に如来を戻した<sup>(29)</sup>。この折、甲府から如来に従って入京していた別当大勧進重繁法師・大本願智慶上人・燈明衆一五人なども久方ぶりに信濃へ帰った。これによって再び信濃の善光寺町が復活することになったのである。

本尊が甲府に去って四二年（足掛け四四年）の長きにわたって信濃の善光寺は、空になった仮堂の建物を残すのみで、僧侶や門前の人々も甲

府に移っていた。武田氏は善光寺平の防衛と統治の拠点として海津城や長沼城を築き、そこに城下町が作られ、商人や職人などが集められ急激に町化していった。ここには善光寺門前の者も移ってきたであろう。

### ③海津城と長沼城

川中島の合戦を契機にして、善光寺平を領有したのは武田氏であった。そしてこの地域の支配の拠点となり、城下町が形成されたのは海津（長野市松代町）と長沼（長野市長沼）であった。そこでこの二つの城下町について確認しておこう。

#### 海津城

海津城は天文二二年（一五五三）に、武田信玄の命令を受けた馬場美濃守などによって築かれたとされる<sup>(30)</sup>。築城されると小山田昌辰を城代にして本丸を守らせ、二の丸には原与左衛門、市川梅印を配置した。弘治二年（一五五六）一〇月からは高坂弾正忠昌信が城代となった<sup>(31)</sup>。永禄三年（一五六〇）六月一五日に武田信玄は、香坂筑前守に在城領として三〇〇貫をあてがっており、同年九月二三日に諏訪の内田監物へ海津城の在城について被官人などの普請役を免許している<sup>(32)</sup>。したがって、この頃に城もでき上がったものであろう。その後元龜三年（一五七二）に高坂昌信が海津城主となり、天正六年（一五七八）五月一日に病没した。その後は彼の次男の源五郎昌貞が入った。

天正一〇年三月、武田家が滅びると森長可がこの地域を領し、海津城主となった。森長可が城主になったのは、当時この地が善光寺平の政治・経済の中心地となっていたからである。

六月二日、織田信長は本能寺の変で没した。このために旧信長領国は大きな混乱に陥った。長可は取るものもとりあえず、上洛した。

その跡に入ったのは越後の上杉景勝であった。彼は六月一六日に越後をたち、川中島四郡を手に入れると、家臣の村上源吾景国を海津城代とした。その後須田満親が天正一四年六月から慶長三年に至るまで、海津の城代になっていた。

しかしながらこの間に豊臣秀吉による天下統一がなされ、慶長三年(一五九八)正月に秀吉は上杉景勝を会津に移封した。秀吉は三月に上杉が領していた跡地を改めて、田丸直昌・関一昌の兩人に与えた。その結果、関一昌は飯山城(飯山市)に入り、田丸直昌が海津城に入った。田丸氏は慶長五年まで海津城にいたが、関ヶ原合戦で西軍に加わったため、家が滅んだ。

このような経過からして、善光寺平の政治経済の中心地が海津城とその城下町にあったことが明白で、旧善光寺町は大きな意味を持たなかった。

#### 長沼城

善光寺平北部における城下町が長沼である。この地は代々島津氏が領していたが、武田信玄の侵略により越後に逃れ、武田氏が領することになった。武田氏はここを对上杉の拠点とすると共に、善光寺平支配の北部の拠点とした。武田氏による長沼城の築城を『長沼村史』は、第一回目を弘治元年(一五五五)、第二回目を永禄四年(一五六二)、第三回目は永禄一一年として(34)いる。『上水内郡誌』は永禄四年に武田信豊に築かせ、永禄一一年一月に馬場美濃守信房に築造させたとして(35)いる。また『千曲之真砂』では永禄一一年に武田信玄が馬場信房に築かせ、原与左衛門・市川梅印に守らせたという(36)。

『長野県町村誌』によれば、永禄一一年に長沼城が築かれた時に、城下の町割を行い、長沼上町・長沼栗田町・長沼六地藏町・長沼内町の四町に分け、長沼津野村を加えて四町一村としたという(37)。このとおりな

ら、長沼栗田町は善光寺門前からやって来た人たちによって作られた町ということになる。いずれにしろ、善光寺平の北の城下町として長沼は武田氏によって整備されたのである。

武田氏滅亡後は、森長可が一時領有したが、その後上杉景勝が領して、旧主の島津忠直が置かれた。慶長三年に島津氏が会津に移ると、豊臣氏の蔵入地となり、関一政がこの城に入って蔵入地を管理した。こうした動きからして長沼城下町は、武田氏の時代よりそのもつ意義が減少したといえる。

長沼は慶長八年に松平忠輝の松代領となり、老臣山田長門守が支配した。元和二年(一六一六)佐久間勝之が長沼城に入って領知し、貞享五年(一六八八)に改易となり、長沼城は廃棄され、以後幕領となった(38)。

#### ④ 空き寺時代の町

信濃の善光寺は、戦国時代から近世初頭の四二年間にわたって本尊がなく、空き寺であった。この間に川中島合戦なども行われ、武田氏の善光寺平支配の拠点として南側では海津城、北側では長沼城が築かれ、そこに城下町もできて、善光寺門前の経済的な意味も減退していた。善光寺の門前町に住んだ職人や商人も甲府の善光寺門前町や、この二つの城下町などに移っていったのである。ともかくこの間の善光寺町の様子を確認しておこう。

妙勸院文書に次がある。

一、令任善光寺大勧進之条、昼夜勤行無怠、御堂・塔建立打成一片可有之儀、肝要二候、仍如件

天正九年九月四日

景勝(判)

妙勸院(39)

坂井衡平氏は宛名の妙勸院を甲府や岐阜にも随伴したといわれる重繁

法印とし、甲斐や越後・美濃などを往復しながら、本寺の妙勸院にあつて飯堂を守っていたとする<sup>(40)</sup>。

『善光寺記録』には、「本仏当山将来以後、四拾八体仏一休信州川中島小庵ニ安置ス、是如来之旧跡なる故也<sup>(41)</sup>」とある。この二つの事実から信濃善光寺は本尊がなくなってもまったく寺としての機能を失っていたわけではなく、本尊のいなくなった場所に小さな庵が設けられ、存続し続けていたようである。

ところで、武田氏に仕えた栗田氏は寛慶寺によつていた。寛慶寺は『吾妻鏡』の治承四年（一一八〇）九月条に、「栗田寺別当大法師範覚」とある栗田入道範覚の創建で、はじめ栗田村の堀之内城郭内にあり、栗田寺と称した。その子孫の覚慶が明応五年（一四九六）二月二二日に亡くなり、その子寛高が寛慶を善光寺東之門に葬り、廟所として一寺を創立し、栗田寺をあわせて寛慶寺とした<sup>(42)</sup>。武田氏の滅亡後に永寿が寺を移し、雲蓮社洞誉上人を招いて住持に開いた。洞誉上人が中興開山で、彼は慶長一年二月二日に亡くなった<sup>(43)</sup>。こうした由緒によれば、戦国時代を通じて寛慶寺は信濃に存在したことになるが、栗田鶴寿や永寿が宛所となっている栗田文書が寛慶寺でなくて大本願に伝わり、中興開山とされる洞誉が慶長一年に亡くなっていることからすると、この寺も善光寺如来が信濃を去っていた間はほとんど廃寺同様で、慶長三年に如来が信濃に戻ってから復興されたと考えられる。

天正九年（一五八一）に伊勢内宮の御師宇治久家が信濃国の道者に御祓いを配つたが、その際の日記によれば、川中島の分として会の里（長野市篠ノ井会）の高野与左衛門（善光寺の平林氏と同名）、同所池の内和泉、同新七郎、おみあさか（麻績安坂で坂井村安坂か）の人である石川（長野市篠ノ井石川）にい宮内衛門、小田切、同入道、同名こしの内匠、高野左近、同所二助、もう一つ川中島分として海津（長野市松代町）の西念寺、同所駒沢主税の助、市村（長野市若里）問屋藤七郎、同

所御代官豊後、荒木（長野市若里・荒木）の内せん四郎、同所与四郎、同所弥左衛門、そして善光寺の内御代官弥左衛門の名が見える<sup>(44)</sup>。

この人数は他所の場合と比較すると少なく、よそでは職人なども見えるのに、そうした者がいない。何よりも善光寺は代官弥左衛門がいるだけで、川中島の中で優位には立っていない。とはいっても、善光寺の地名が残っており、代官が置かれているので、善光寺は何らかの形で続いていたようである。栗田氏がこの地に所領を維持していたことも考えられ、古くからのつながりで、寺もわずかばかりの命脈を維持していたのであろう。

武田氏が滅亡してから一年後の天正十一年三月に、上杉景勝は次の制札を出した。

#### 制札

右信州越国往復之人民、経横道之事、堅令停止畢、所詮自牟礼香白坂を直に長沼へ可令往還之由、仰出被成御朱印者也、仍如件

天正十一年三月日

奉行中

（朱印）<sup>(45)</sup>

この時期に上杉氏は海津城を押えていたので、海津城下と長沼城下が善光寺平の城下町として重要な意義を負っていたといえる。小林計一郎氏はこの文書で道が善光寺を通らぬことに注目しているが、肯定すべきであろう。これは当時の善光寺周辺がほとんど経済的な意味を持つておらず、町としての機能を失っていたことを示す。

#### ⑤復興する町

秀吉が善光寺の本尊を信濃に返したのは慶長三年（一五九八）八月であった。先に見たようにこの時に善光寺の町はほとんど町としての体になしていなかった。しかしながら、近世には善光寺町は善光寺平を代表

する町になった。したがって、如来が戻ってから急激に善光寺町が復興していったといえる。

慶長五年（一六〇〇）夏に、善光寺のお堂が建立された<sup>47</sup>。慶長六年七月二七日、徳川家康は善光寺に寺の周囲の長野村、箱清水村、七瀬河原、三輪村で一〇〇〇石の寺領を寄進した<sup>48</sup>。寺領が一〇〇〇石であるから、仮に寺が領主としての性格を強く持っていたとしても、領主権力を前提にだけでは、後に北信の中心となるような町には生まれ得なかったであろう。

善光寺宿は「善光寺町年寄・問屋・本陣・庄屋名前帳」（年次不詳）によれば、「慶長六丑年被 仰付」とあるが、北国往還の改修とともに慶長一六年九月に伝馬宿に定められた<sup>49</sup>。この時には上杉氏公認の牟礼・長沼往還のみでなく、水内郡柏原村・新町・善光寺・更級郡丹波島にもあてられた。この際、善光寺では大門町・西町・東町が伝馬役を負った。そして北国往還の宿であることを理由に、近郷のみならず他国の者に対しても融通交易の場所として市立てがなされた。伝馬宿としての重要性が、領主の町化公認となったのである。こうして如来が帰ってわずか三年の間に、善光寺は急速に門前町としての様相を整えた。幕藩体制が出来上がって藩を越えての人の移動が難しくなっただけに、甲府善光寺の門前にいた商人や職人たちが信濃に帰住することはなかったようで、周囲の村々から集まって来た人が多かった。短期間に町が復興するほど、善光寺信仰は篤く参詣者も多かった、それに宿場町の性格が加わったのである。

寛永一六年（一六三九）七月に下大門町が大勧進代官高橋円喜齋の不法を幕府に訴えた<sup>50</sup>。そしてこの翌年に善光寺町に町年寄が置かれた。こうして善光寺如来が帰ってから四〇年の間に、善光寺の門前は急速に町化していったのである。ちなみに本尊が帰ってから約一〇〇年後の元禄五年（一六九二）の善光寺宿の構成は、御伝馬屋敷が大門町四六軒、西

町一七軒、歩行役屋敷が西町・阿弥陀院町四〇軒、東町二六軒、東後町一三軒であった。

注目したいのは、近世の善光寺平に松代藩一〇万石が存在したことである。松代藩は武田信玄が作った海津城を修築した松代城とその城下町が根拠地だった。したがってこの地域の政治的な中心地は松代にあり、善光寺町は宗教都市、宿場町として領主の政治的意図とは比較的關係に独自の発展を遂げていったのである。

復興した善光寺は、寛永一九年（一六四二）五月九日に西町から出た火のために金堂および諸堂舎とも悉く焼け、寛文六年（一六六六）に金堂が落成した。その後、金堂は元禄一三年（一七〇〇）七月二一日の夜の火事のために焼けたので、場所を現在地に移して再建し、宝永四年（一七〇七）八月に金堂が落成した<sup>51</sup>。

善光寺が近世に復興してきた状況を見るために、大勧進と大本願を除いて山内の寺院について『長野県町村誌』<sup>52</sup>から確認すると、次のようになる。

善光寺山内宗徒

慶長年中（一五九六～一六一五）中興一長養院・玉照院・円城院・威徳院・常住院・世尊院・常智院・福生院・本覚院・良性院

元和年中（一六一五～二四）中興一吉祥院・徳寿院

寛永年中（一六二四～四四）中興一教授院・蓮華院・尊勝院・最勝院・葉王院

院・葉王院

慶安年中（一六四八～五二）中興一光明院

寛文年中（一六六一～七三）中興一常徳院

善光寺山内妻戸

天正四年（一五七六）中興一常行坊

文禄二年（一五九三）中興一寿量坊

慶長一八年（一六一三）中興一玄証坊

寛永三年（一六二六）中興―善行坊

不明中興―甚妙坊

善光寺山内中衆

不明―堂照坊・堂明坊・兄部坊・随行坊・常円坊・正信坊・淵之坊・

野村坊・白蓮坊・正智坊・浄願坊・德行坊・向仏坊

右を整理すると、天正年中一 文禄年中一、慶長年中一、元和年中二、寛永年中六、慶安年中一、寛文年中一、不明一四となる。ほとんどの院坊が慶長年中以降の中興もしくは創建であり、慶長三年に善光寺の本尊がこの地に帰ってから造られたものといえる。つまり、僧侶の側も慶長以降に急激に人数が増えていったのである。当然僧侶の数の増加に対応して、町人も増えていったであろう。

## おわりに

『大塔物語』に見られるように、中世に善光寺の門前は町化していた。しかしながら、この地域は戦国時代に川中島合戦の舞台となり、武田氏と上杉氏との戦火に見まわれた。戦争の中で上杉氏も武田氏も善光寺を自領に移そうとしたが、特に武田信玄はその本尊を甲府に遷した。このために戦国時代の末に信濃の善光寺町はほとんど消滅した。逆に越後と甲斐の善光寺の門前には門前町ができ、信濃から移っていった者も相当あったと考えられる。

武田氏滅亡後、善光寺の本尊は時の権力者によって次々に奪取され、結局、豊臣秀吉が方広寺の本尊として京都に迎えた。しかし、慶長三年に豊臣秀吉が善光寺本尊を信濃に返したことにより、再び信濃の善光寺門前町が復興した。しかし、領主側からすると善光寺の町を特別な門前町として認定しておらず、宿でしかなかった。なお町のあったのは長野・箱清水・七瀬川原・三輪村の内で、正式には善光寺町はなかった。

近世に領主側が町として認定したのは、城下町であるが善光寺の門前町はそれに該当せず、領主側の積極的な振興策によってできた町でもない。それだけに、善光寺門前町の形成に当たっては、領主側の権力よりも町人たちの自発的な意識が強かった。善光寺に参詣に来る民衆と、善光寺そのものや僧侶たちを相手にして職人や商人が周囲から集まり、自然と町が形成されていったのである。したがって近世の町成立に当たっても、職人や商人の自発的な集住が不可欠であり、それに対応するよう多くの人々が存在したことに注意しなくてはならない。

近世を通じて川中島四郡の政治、経済の中心は松代に存在したが、善光寺町は政治とは関係のないところで膨張していった。その後近代の展開の中で、善光寺町が長野県の中心になり、松代はそれに吸収されてしまった。一〇万石もの大城下町が、門前町に呑み込まれてしまったのである。

今後中世から近世への移行期の都市研究に当たっては、城下町研究の他にも、善光寺門前町のような宗教都市、宿場町、港町などの、独自の役割を持った町の個別的な特性を明らかにし、それらをもう一度総合化していく必要があるだろう。

## 註

- (1) 拙稿「甲斐吉田の町の中世から近世へ」(『信濃』第四六卷二一、一九九四)
- (2) 『詳説日本史』一四六頁(山川出版社、一九九五)
- (3) 『善光寺如来縁起 元禄五年版』(銀河書房、一九八五)、『善光寺縁起』(『大日本仏教全書』第二二〇冊、名著普及会、一九八〇)、『扶桑略記』三、『伊呂波字類抄』
- (4) 米山一政「善光寺瓦と善光寺の草創」(『志茂樹先生還暦記念会編「地方史研究論叢」、一九五四)
- (5) 『信濃史料』第四卷一四頁
- (6) 『日本の絵巻20 一遍上人絵伝』二四頁(中央公論社、一九八八)
- (7) 『信濃史料』第七卷 三六八頁
- (8) 『信濃史料』第一一巻 二九五頁

- (9) 坂井衡平『善光寺史』九一五頁(大正堂書店、一九三〇)  
(10) 『信濃史料』第九卷 二七頁  
(11) 『長野県町村誌』北信篇 一一一頁(長野県、一九三六)  
(12) 『富士吉田市史資料叢書10 妙法寺記』四三頁(富士吉田市教育委員会、一九九一)  
(13) 『善光寺史』九二二頁、『善光寺大本願御歴代』  
(14) 『新潟県史 史料編5』三九三八号文書(新潟県、一九八四)  
(15) 『王代記』六八頁(文林堂書店、一九七六)  
(16) 『甲斐善光寺文書』二五頁(東洋文化出版、一九八六)  
(17) 『信濃史料』第二卷 二一〇頁  
(18) 『清水市史史料 中世』三一九号文書(吉川弘文館、一九七〇)  
(19) 坂井衡平『善光寺史』九二二頁  
(20) 『信濃史料』第三卷 三九六頁  
(21) 『信濃史料』補遺卷上 四八九頁  
(22) 『信濃史料』第一五卷 一六頁  
(23) 『信濃史料』第一五卷 三三頁  
(24) 『信濃史料』第一五卷 三三頁  
(25) 『甲斐善光寺文書』二七〇頁  
(26) 『信濃史料』第一五卷 五二五頁  
(27) 『信濃史料』第一八卷 二〇二頁  
(28) 『信濃史料』第一八卷 二〇六頁、『善光寺大本願御歴代』  
(29) 『信濃史料』第一八卷 二八七頁  
(30) 『長野県町村誌』東信篇 一五一七頁(長野県、一九三六)  
(31) 『松代町史』上巻 一七七頁(松代町役場、一九二九)、『甲陽軍鑑』  
(32) 『信濃史料』第二二卷 三〇一頁  
(33) 『信濃史料』補遺卷上  
(34) 『長沼村史』二六頁(長沼村史刊行会、一九七五)  
(35) 『上水内郡誌』二二五頁(上水内郡役所、一九〇八)  
(36) 『信濃史料叢書』  
(37) 『長野県町村誌』北信篇 二八二頁(長野県、一九三六)  
(38) 『長野県町村誌』北信篇 二八六頁  
(39) 『新編会津風土記』  
(40) 坂井衡平『善光寺史』九五七頁(大正堂書店、一九三〇)  
(41) 『甲斐善光寺文書』二七頁  
(42) 『長野県の地名』八〇二頁(平凡社、一九七九)  
(43) 醉古山人(栗岩英治)『寛慶寺考』(一)(二)(第一次『信濃』第三卷一・三号、一九三四)  
(44) 『信濃史料』第一五卷 七六頁  
(45) 『信濃史料』第一六卷  
(46) 小林計一郎『長野市史考』七二三頁(吉川弘文館、一九六九)  
(47) 『信濃史料』第一八卷 四一三頁  
(48) 『長野県史 近世史料編』第七卷(二) 六七二頁  
(49) 『歴史の道調査報告書Ⅲ―北国街道―』六三頁(長野県教育委員会、一九八〇)  
(50) 『長野県史』史料編(二) 七〇三頁  
(51) 坂井衡平『善光寺史』、『長野県史 近世史料編』第七卷(三) 七〇〇頁以下  
(52) 『長野県町村誌』北信篇 一一一頁  
(信州大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

---

## The Zenkōji Temple Town from the End of the Medieval Period to the Beginning of the Early Modern Period

SASAMOTO, Shōji

Nagano 長野 city has long been famous as the Zenkōji temple 善光寺 town; in this paper I will examine its actual conditions from the end of the medieval period to the early modern period.

The Zenkōji temple town developed throughout the medieval period, but in Eiroku 1 永禄一 (1558), when the main and other images of Zenkōji temple were taken to Kōfu 甲府 by TAKE-DA, Shingen 武田信玄 the priests, artisans, and even the merchants followed. After Zenkōji moved to Kōfu, Kaizu 海津 and Naganuma 長沼 castles became the focal points of the Nagano basin, and castle towns were formed there. Zenkōji temple town, which had lost its main image, went into decline, and the castle towns of Kaizu and Naganuma also became the economic centers of the region. It was in Keichō 3 慶長三 (1598) that TOYOTOMI, Hideyoshi 豊臣秀吉 returned the main image of Zenkōji to Shinano 信濃. The area, which had not had the image for forty years and had ceased to be an actual temple town, became one once again. From then on it developed rapidly as a religious center and post town, reviving without any connection to political power, and once again took on the role of the economic center of northern Shinano. During this period it was not the case that there were political orders directed at the formation of a temple town; artisans and merchants gathered of their own free will. On the other hand, in the early modern period Kaizu castle, which had been developed by TAKEDA, Shingen, became Matsushiro, 松代城 and its castle town also developed as a political city.

There is a tendency to focus on the problem of autonomy with respect to medieval cities, which are taken to be places to which people gathered freely, and, in opposition, to take the castle town as the model of the early modern city, and to discuss it only in terms of the formation and control of towns by feudal power. However, in the case of the Zenkōji temple townspeople were not assembled by political means; rather, they collected on their own, and thereafter the town strongly maintained elements of urban autonomy. It is necessary to examine the conditions of a variety of early modern cities with the expectation that in many of townspeople had this kind of independence. Moreover, rather than insisting on the discontinuity between the medieval and modern periods, we must turn our attention to the aspects of continuity between them.

---